



センター長報告

半年の活動を振り返って

この度、センター長としての最初の数か月の仕事を扱ったCISMOR VOICE, Vol. 27が公刊されることを嬉しく思います。私は本年4月よりセンター長の職責を担い、センターの様々な宗教的構成要素における、より深く、より幅広い対話の実現を目指しています。

当センターにおいて最も重要と考えられる課題の1つは、宗派を超えた領域で新しい意見をもたらし、現在展開している我々の世界の宗教的変化に関する議論に貢献するために、若い研究者を歓迎する雰囲気醸成することです。

それゆえ、今年度のCISMORの活動は、今回その一端を発表した博士論文の執筆に従事している博士後期課程の学生や、その研究成果を提示したポストドク研究者を含む若手研究者のため、4月に開催されたワークショップから始まりました。各々の演題に垣間見られるように、彼らの研究は皆、幅広く学際的なものでした。この最初のワークショップは聖書学とユダヤ学に充てられましたが、本年度の次の2つは、古代オリエント学と、政治と宗教に関する近代の解釈に充てられる予定です。

この期間、我々はキリスト教と宣教活動に関する2つのセミナーを開催致しました。1つは16～17世紀のシリアに関するもの、もう1つは19～20世紀の日本に関するものでした。シリアのキリスト教について我々は、大学間の学術交換プログラムの一環として同志社大学に訪れたBernard André Heyberger教授から知見を得ることができました。Heyberger教授は、彼が研究してきた記録に着目することから、それらの世紀における、アレppoのキリスト教コミュニティが関わっていた政治的発展についての興味深い見解を示されました。次のセミナーは、Christian Morimoto-Hermansen教授による、20世紀前半の日本に於けるデンマーク人宣教師の活動状況についての発表でした。

CISMORおよび同志社へのVisiting Scholarsによる2つの講演は、いずれもアニメーションをテーマとしたものでした。1つ目はMiki Dalot-Bul博士による、アニメ・カトーン（アメリカにおける日本の文化的適応のひとつ）がBlack Charactersを用いる手法についてのものでした。2つ目は、本年、CISMORに客員研究員としていらしているAmal Refaat博士による、エジプトにおける日本の文化的適応としてのアニメについて扱ったものでした。これらの講演は全てCISMORウェブサイト上のYouTubeより閲覧が可能です。

さらに6月には、ユダヤ教の「カシュルート」とイスラームの「ハラール」に特に関連する「宗教と禁止」に対する考え方に関して、2名の著名な学者とのシンポジウムを開催致しました。Jonathan Magonet教授/ラビは、ユダヤ教における聖書の禁忌の理解の仕方、その歴史的な展開、そしてユダヤ社会における今日の位置について話されました。彼はまた、特にヨーロッパにおける、それらの禁止への非ユダヤ人達による今日の対応にも言及しました。イスラーム社会については小田淑子教授が話されました。彼女は、ムスリムにとってのハラールの意味、特に、日本人による理解とは異なった、この特別な食物規範が彼らの社会的な出遭いを形成し得る過程に関して語られました。この「宗教と禁止」のテーマは秋学期においてもキリスト教、ユダヤ教、仏教のそれぞれの禁止に対する歴史上の考え方を扱う第2回シンポジウムで継続致します。2019年2月の当シンポジウムのお知らせをご期待ください。

春学期最大の国際会議は、CISMORおよび同志社大学神学部・神学研究科とエルサレム・ヘブライ大学人文学部との学術協定によって催されました。同会議は、エルサレムのアブラハム・ハーマン・現代ユダヤ学研究所で開催され、日本からは主に、同志社大学神学部の研究者を中心に7名が発表致しました。同会議で発表した他の研究者は、シカゴ大学やエルサレム・ヘブライ大学から参加していました。上記以外の日本の研究者もまた、数名来聴されました。提示された論題は主として現代のユダヤ教を扱ったものでしたが、聖書のトピックの解釈について議論された論考もみられました。2012年より此度3回目を迎えた同シンポジウムは、若手および自立した研究者に、討論や相互の学び、相互理解のための時間と空間を提供しています。会議の雰囲気はとても意欲的でありオープンな議論を促していました。来年度、是非第4回シンポジウムを開催したいと願っています。

この6ヶ月間に行われた当センターの活動は、センターが関わり、携わるテーマの多様性の増大と、議論のための場の提供を試みていることを示しています。若手研究者がそれぞれの分野における自立した研究者に接する機会もまた、会議やワークショップの活動における重要な要素です。我々の活動の詳細は、我々のウェブサイトに記載され、録画され、公表されていますので、どうぞご覧下さい。年1回発行される学術誌も、我々の研究者による研究成果のプラットフォームを提供しています。我々のウェブページ上でチェックしてみてください。（一神教学際研究センター長 Ada Taggar-Cohen）



CISMOR ワークショップ

Cross-Cultural Flows: Black Characters in American Animation, Anime-inspired Cartoons and Anime

主催：同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）

【講師】 Michal (Miki) Daliot-Bul
(ハイファ大学アジア研究科准教授)

【日時】 2018年4月12日(木) 16:40-18:10

【会場】 同志社大学今出川キャンパス 至誠館3階会議室

Michal (Miki) Daliot-Bul 氏は、自身の著書(共著)である *THE ANIME BOOM IN THE UNITED STATES* に基づき、自身の研究が、“Anime inspired Cartoons”が、アイデア、イメージ、表現を新しいアニメーションの文脈にどのように適応させ、どのように表現の意味を変化させるのかを探る有用なケーススタディを提供するという点に於いて、異文化適応の研究に類することを示し、新しい表現：“Anime inspired Cartoons”が、アニメの世界的人気の絶頂期に開発されたマーケティング戦略として理解されるべきであることを主張した。

Bul 氏は、“Anime inspired Cartoons”の例として先ず“Powerpuff Girls”を挙げ、元々アメリカのカトゥーンであったものが、基のキャラクターの形状や音楽、ストーリー他を変化させて、日本のアニメ「パワーパフガールズ Z」として再提供されていた事例を示した。また、“Anime inspired Cartoons”は、①1990年代後半以降のアメリカで主流の大人向けカトゥーン(例：“The Simpsons”、“South Park”、“Family Guy”、等)をアニメ化の参考にしたもの、②fetish として日本らしさを求めるカトゥーンで、恐らく Cool Japan の潮流が最も反映されたもの(例：“Hi Hi Puffy Ami Yumi Show”、“Kappa Mikey”、等)、③アニメの様に見えるテレビカトゥーンを制作するまでに、アニメのスタイルと説話術を交換したものの(例：“Oban Star Racers”、“Avatar: The Last Airbender”、等)、④ハイブリッドで革新的なものを生み出す為の着想或いは参考点としての説話術、表現、イメージを用いたカトゥーン(例：“Samurai Jack”、等)、といった4つのカテゴリーに分類され、それらはアメリカに於いてマーケティング戦略として用いられている、というものであった。

また、“人種表現の異文化間移転(African-American Culture の例：“The Boondocks”、“The Proud Family”、“Startic Shock”、“Hey Monie”、等)”といったカトゥーンの新たなスタイルが生じ、これらの“Boondocks-Style”が、African-American Culture の特徴であるジャズやヒップホップ・スタイルおよび

黒い肌のキャラクターを採用した点において、「サムライ・チャンプルー」や「カウボーイ・ビバップ」等といった日本のアニメに影響を与えた、と講じた。

更に、従来 African-American のイメージは人種差別主義を想起させるものであったが、1990年代の日本で、「ガンibro (Black Face Girls)」や「ワタナベシンイチ監督作品」等のサブカルチャーとして彼らのスタイルが受け入れられていた、との見解を示した。アメリカでは肌の色に関するトピックはしばしば政治的な意味合いをもつため、アニメにおいて Black Characters を用いることは人種表現の異文化間移転を意味する、と講じた。アメリカでは通常 White Character と Black Character とを共に登場させた場合、人種差別主義の典型例として捉えられることがしばしばであり、非常に気を付けなければいけないトピックであった。これに対し、日本のアニメでは、日本人に昔から良く知られている例として漫画やアニメ等これまでに様々なメディアで放送され続けてきた「サイボーグ009」の作中にて Black Face のキャラクター(008 (ピュンマ))が White Characters の仲間として登場したり、また他の日本のアニメでも「ドラゴンボール」中の「ミスター・ポポ」や「ポケットモンスター」中の「ルージュラ (Jynx)」、「シャーマンキング」中の「チョコラブ (Joco)」、「超時空要塞マクロス」中の「クローディア」といった Black Characters の登場例を示した。前述の“Boondocks-Style”である「カウボーイ・ビバップ」や「サムライ・チャンプルー」の作中でも Black Characters やヒップホップ・スタイル、等の用例があったが、これらはいずれも人種差別主義的表現とは異なり、ダイバーシティの象徴として用いられていることを示した。

以上、日本文化は Black Characters を蔑視していないという特徴があり、こういった「ワタナベ監督作品」の様な日本のサブカルチャーにみられる振舞いが、現下のグローバル社会に於ける文化の尊重や意思疎通をはかる上で重要であることを強調し、発表を締め括った。

(CISMOR 特別研究員 阿部泰士)



Michal (Miki) Daliot-Bul 氏

CISMOR First Young Scholars' Workshop

(第1回 CISMOR 一神教学際研究会)

“Studies in Religion: Bible and Jewish Studies”

主催：同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)

共催：同志社大学神学部・神学研究科

【発表者】 Yuji Endo ほか 13 名 (詳細は本文参照)

【日 時】 2018 年 4 月 14 日 (土) 9:00-16:00

【会 場】 同志社大学今出川キャンパス 神学館 G31 教室

2018 年 4 月 14 日、第1回「CISMOR 一神教学際研究会」が開催された。この会の主旨は、大学院生などの若手研究者に研究発表の機会を提供し、また、その発表に対して与えられる研究者からのフィードバックなどを通して、若手研究者の育成を図ることである。CISMOR 設立の主旨のひとつに「若手研究者の養成」があり (<http://www.cismor.jp/jp/archives/coe/>)、CISMOR は 2003 年の設立以来、様々な形でそれを行ってきた。今年度より、アダ・タガー＝コヘン新センター長のイニシアティブの下、「CISMOR 一神教学際研究会」という名称で、年に複数回、ワークショップを開催することになった。今回はその第一回である。今回の研究会では、博士後期課程在籍中の院生の発表が中心に行われ、その後、博士号取得者が博士論文の内容紹介から現在にまで至る自らの研究経歴を紹介した。発表は質疑応答も含め、英語でなされた。具体的なプログラムは以下の通りである。

SESSION A

09:05-09:35

Yuji Endo (遠藤 勇司：同志社大学大学院神学研究科)

“זכר in the Hebrew Bible”

09:35-10:05

Etsuko Tsutsumi (堤 悦子：同上)

“The waw-consecutive Usage in the Book of Jonah Prose”

10:05-10:35

Michio Akao (赤尾 道夫：同上)

“‘All Israel’ (כל ישראל) in the Books of Chronicles”

SESSION B

10:45-11:15

Takuya Kobayashi (小林 拓也：同上)

“Hasidic Stories in Modern Jewish Research”

11:15-11:45

Megumi Ishiida (石井田 恵：同上)

“The Early Ages of Messianic Jewish Movement”

11:45-12:15

Shirah M. Cohen (シーラ・M・コヘン：同志社大学国際教育インスティテュート)

“Literature in National Context: The Case of Mori Ōgai and Hayyim Nahman Bialik”

12:15-12:45

Yu Amano (天野 優：同志社大学大学院神学研究科)

“Jewish Intellectuals in Iraq”

SESSION C

13:30-14:00

Miyaki Arai (新井 雅貴：同上)

“The Function of the Pit בור as a Burial Place in the Hebrew Bible”

14:00-14:30

Kayo Yasunaka (安仲 佳代：同上)

“The Manumission of Slaves in Jeremiah 34:8-17: The Use of Two Words חֲפְשִׁי and דְרוֹר”



左から、
山本孟氏、阿部泰士氏、
Michal (Miki) Daliot-Bul 氏、
天野優氏、Ada Taggar-Cohen 氏



左から、
新井雅貴氏、安仲佳代氏、
赤尾道夫氏



左から、
小林拓也氏、石井田恵氏



北村徹氏



平岡光太郎氏



石黒安里氏



左から、Shirah M. Cohen 氏、遠藤勇司氏、堤悦子氏



SESSION D Short Research Description
(PD Researchers of the Faculty of
Theology and CISMOR)

14:45-15:00

Dr. Tetsu Kitamura (北村 徹：同志社
大学 CISMOR 特別研究員／ CISMOR
リサーチフェロー)

“The Lack of ‘Zion’ in the Book of
Ezekiel”

15:00-15:15

Dr. Kotaro Hiraoka (平岡 光太郎：同
志社大学神学部特任助教／ CISMOR
リサーチフェロー)

“From Abarvanel to Buber”

15:15-15:30

Dr. Anri Ishiguro (石黒 安里：同上)
“Cultural Zionism in America;
American Judaism and Women”

15:30-15:45

Dr. Hajime Yamamoto (山本 孟：同志
社大学研究開発推進機構研修員／ CISM
OR リサーチフェロー)

“Religious Role of Kings in the
Ancient Near East focusing on the
Hittite Royal Ideology”

15:45-16:00

Dr. Taiji Abe (阿部 泰士：同志社大学
CISMOR 特別研究員／ CISMOR リサー
チフェロー)

“Industrial Aspect of Monotheistic
Religions, and Religious Business”

センター長および上記参加者のほか、ゲ
ストとして、Dr. Michal (Miki) Daliot-Bul

氏 (ハイファ大学アジア研究科准教授)、
Dr. Doron B. Cohen 氏 (同志社大学神
学部嘱託講師) が参加した。

上述のように発表内容は多様だった。
ヘブライ語聖書に関しては、それぞれの
テキストにおいてキーワードと想定され
る特定の語(「記憶する」「全イスラエル」
など)や、文法的特徴に注目した研究、
あるいは埋葬や奴隷など文化的側面に注
目した研究などが報告された。また、近
代のメシアニック・ジュー出現の歴史的
文脈の分析や、近代におけるハシディズ
ム的な物語の「再発見」の背景などに注
目した、ユダヤ教に関するもの、あるい
は、森鷗外とナフマン・ビアリクに注目
した 18 世紀末の民族主義の台頭に関す
る分析や、20 世紀前半の近代化、世俗化
が進んだイラクにおいて、集合性や共同
体意識などのテーマに関する多様性を展
開したユダヤ知識人に注目した発表など、
文学に関するものなども報告された。
いずれも、それぞれの発表者の関心の所
在を示すものであり、いずれも萌芽的
ではあったが、今後の展開が期待される
ものだった。

冒頭に記したように、この CISMOR
一神教学際研究会は、若手研究者に発表
の機会を提供するために、今後も定期的
に開催される予定であり、今年度に関し
ては既に 12 月に 2 度、開催されることが
決定されている。CISMOR 設立の主旨
に鑑み、本研究会の活動がいつそう活発
なものになっていくことが期待される。

(CISMOR 特別研究員 北村徹)

Christians in Aleppo (16th-19th Century) : Communities and Individuals

主催： 同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)

共催： 同志社大学グローバル・スタディーズ研究科

【講師】 Bernard André Heyberger
(フランス国立社会科学高等研究院教授)

【日時】 2018年4月19日(木) 16:40-18:10

【会場】 同志社大学烏丸キャンパス 志高館SK203教室



Bernard André Heyberger 氏

ベルナルド・エベルジェ氏は、オスマン帝国時代のアレppoのキリスト教の意義について講演された。アレppoは17世紀、人口に関してはイスタンブールやカイロに続く第3の都市だったが、キリスト教にとっても非常に重要な都市であった。1960年までアレppoの人口の4分の1はキリスト教徒だったが、その後、その割合は減少し、2011年には、キリスト教徒は400万人の人口中、数千人となった。

当時、アレppoがキリスト教徒の街として重要だった理由は、その人口のみならず、いわゆる「ナフダ(Nahda)」を導いた、非常に重要な文化的推移が生じたことによる。「ナフダ」とは、アラブ復興運動であり、それはアラブ世界における文化的、言語的な覚醒を意味し、西洋の強力な影響の下に19世紀に始まった。ナフダを促した要因は、アレppoとそこにおけるキリスト教徒が、中東のキリスト教の伝統、アラブ-イスラームの古典文化、ペルシャやオスマン・トルコの宮殿文化と、西側のローマ・カトリック、東側の正教会のギリシャ・スラブ的な要素との文化的横断の位置に在ったことによる。17-19世紀のこの宗教的、文化的、芸術的に豊かな相互作用は、アレppoをナフダのゆりかごとした。アレppoのこの役割はしかし、今日、現地のキリスト教徒の間では、ほぼ忘れられている。

アレppoの事例は、イスラームに囲まれたこの時代状況において、キリスト教徒であったことの意義を示している。オスマン帝国のアーカイブはキリスト教徒の社会生活に関する形跡を提供し、17世紀以降に関しては、地元教派の資料(写本や年代記、教会の規定、紀行文、手紙、イコンなど)を含んでいる。西方の領事、旅行者、カトリックの伝道師なども、シリアの都市について豊富な記録を残している。

アレppoのキリスト教徒は、5世紀の政治的、神学的な対立によって、ギリシャ系のメルカイト(Melkite)、アルメニア系(Armenian)、西シリア系のヤコバイト(Jacobite)、マロナイト(Maronite)、東シリア系のネストリウス派(Nestorian)などの教派に分かれていた。アンティオキアの総主教はダマスカスにその座を持っていたが、しばしばアレppoの住人によって選出され、時にはそこに留まった。

アレppoのキリスト教徒は、イスラーム

法で庇護民を意味する「ズィンミー(dhimmi)」と見なされ、多くの差別的な法に従っていた。教会の新築や修復、また、通りやモスク付近でキリスト教の儀式を行うことは禁じられていた。ムスリムと同等の法的権利を持たず、法廷ではムスリムが証言の代行を行った。彼らは人頭税、「ジズヤ(djizya)」を支払わなくてはならず、また、特別な衣服を着なくてはならなかった。オスマン帝国がキリスト教徒の軍隊に敗けた時には、スルタンがイスラーム法を強化して、その敗北を補うこともあった。キリスト教徒の区画は強制移住区域(Christian ghetto)では無かった。ムスリムとキリスト教徒、キリスト教徒とユダヤ教徒との間で土地の売買がなされ、集合住宅にムスリムとキリスト教徒が住むこともあった。キリスト教徒はオスマン帝国の政治システムに相当程度統合されていたが、彼らに対して、背信や敵との共謀の疑いも存在した。それ故、アレppoのキリスト教徒たちは強迫的に、オスマン帝国の王位への忠誠を表現するための努力を行っていたと主張し得る。

アレppoのキリスト教史における転換期は、17世紀、カトリックの宣教師の到来とともに、彼らが西方に扉を開いたことである。多くの子供たちがローマに送られ、その幾人かがアレppoに帰還した結果、ラテン語やイタリア語の著書をアラビア語に翻訳され、カトリックのベストセラーが17世紀末にはアラビア語で読まれることになった。

アレppoのキリスト教徒は、17世紀以降、オスマン帝国による平和から利益を得たが、その境界を超えて、広範に外部とも接触を保っていた。イスラームの支配的な文化に直面しながらも、このことが彼ら固有の文化と歴史において働き、彼らのアイデンティティを形成させる機会を与えた。また、ローマ・カトリックによって導入された新しいキリスト教も、19世紀の「アラブ覚醒」に顕著な貢献を果たした。現代においては、西洋の文化と東のアラブの文化の関係を捉え直すこと、そして、アラブを犠牲者としてだけでなく、彼ら自身の歴史における主役として再考することが必要ではないだろうか。

(CISMOR 特別研究員 北村徹)

第15回 CISMOR セミナー

When the Missionary Meets the Other: The Case of a Dane, Jens M.T. Winther (1874-1970) – Based on His Own Words

主催：同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)

【講師】 Christian Morimoto-Hermansen

(関西学院大学法学部教授)

【日時】 2018年5月26日(土) 13:00-14:30

【会場】 同志社大学今出川キャンパス 至誠館3階会議室

ヘアマンセン氏 (Christian Morimoto Hermansen 氏) は、デンマーク人宣教師 ウィンテル (Jens Mikael Thøgersen Winther, 1874-1970) が、その日本伝道活動中に出会った主要な4人、米村常吉、稲富肇、賀川豊彦、内村鑑三とその配偶者たちについて講じた。

ヘアマンセン氏は、自らの研究の使命が日本に於けるデンマーク人の伝道に関わった人々の声を聴くことによってその全体像を伝える事にある、と説明した。そのため、ウィンテルに関しても、本人の伝記のみに焦点を当てるのではなく、彼以外の人物が遺した詳細な記述も参考にしてウィンテルの生涯について議論・推測することが重要であるとした。

米村常吉とウィンテルとの出会いは、ウィンテルが横浜に来日した1898年9月7日の2週間後であった。来日当初、彼はアメリカ人宣教師の医師の家に身を寄せていたが、忙しい医師を煩わせたくないと考え、自分の食事付きの下宿と日本語の教師を探し始めた。そこで、彼は米村夫妻に世話になることになった。

その後、ウィンテルは日本で宣教師として活動を開始した。1899年当時、アメリカ人の牧師ピーリー (Peery) は南部ルーテル教会から派遣された日本で唯一のルター派の宣教師であり、佐賀市で活動をしていた。ウィンテルは彼を派遣した宣教団から、このピーリーの活動に協力する許可を得た。婚約者アンドレア・ハンセンをアメリカからよびよせ、鎌倉市で結婚して、1899年の秋に佐賀市に引越した。1901年、ウィンテル夫妻は久留米市に移り住み、既にあった小さな集會に力を入れることにし、米村牧師夫妻を呼び寄せた。ウィンテルを支えたデンマーク人にとって、久留米ルーテル教会は日本代表役を果たした。

久留米市に移って間もなく、ウィンテルは稲富肇と出会った。稲富はウィンテルとその妻により信仰へと導かれ、1908年、久留米商業学校 (現・久留米商業高

等学校)3年生の時に米村先生に洗礼を授けた。これは、稲富の父がウィンテルに自身の長男である肇について「この腕白小僧を良い人間にさせていただきたい」と頼んだことがきっかけであった。

ウィンテルは神学校を設立するため、1909年に久留米市から熊本市へと移住した。彼と米国のルーテル教会は男子中等学校の設立を考え、その男子校、九州学院が1911年に開校した。1921-1945年間、稲富肇は九州学院チャプレンそして学長として、教え子をはじめ、近隣の人々にクリスチャンのロールモデルになった。第二次世界大戦後、稲富はアメリカで引退したウィンテルを日本へ呼び寄せて、神戸市で日本への伝道活動を再開できるように手伝った。

同1911年、ウィンテルは日本の宗教者と面談するために来日したデンマーク内国伝道協会の有力者カール・アクセル・スコウゴー＝ピーターセン (Carl Axel Skovgaard-Petersen) のガイド兼通訳として日本を旅した。その際に出会ったのが、賀川豊彦、内村鑑三である。

ウィンテルは、当時、神戸の「スラム街」であった新川地区で賀川と出会った。この出会いは、賀川のデンマーク訪問、農民福音学校の設立へとつながった。また、ウィンテルとの出会いが内村の『デンマーク国の話』執筆の機会の一つとなったと考えられる。

賀川と内村は、日本においてはいまだ知られた人物である一方、米村と稲富の知名度はそこまでではなかったかもしれない。しかし、米村も稲富も日本福音ルーテル教会設立時において重要な役割を果たしている。

米村夫妻、稲富夫妻、賀川そして内村にとってウィンテルとの出会いは、それぞれに違うであろう。しかし、ウィンテルと彼の伝道活動にとっては、重要な人物であった。

(CISMOR 特別研究員 阿部泰士)



Christian Morimoto-Hermansen 氏

シンポジウム

宗教と禁止：ユダヤ教の『コーシェル』とイスラームの『ハラール』に関する法の理解

(Religions and Prohibition: Understanding the Jewish 'Kosher' Laws and the Islamic 'Halal')

主催：同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）

共催：同志社大学神学部・神学研究科

【講師】 Jonathan David Magonet

（レオ・ベック大学（ロンドン）名誉教授）

小田 淑子

（元・関西大学教授）

【日時】 2018年6月16日（土）13:00-15:00

【会場】 同志社大学今出川キャンパス 神学館チャペル

CISMOR では今年度から、「宗教における禁止：近代における古代の慣習—食物やその他の生活に関する禁止 (Religious Prohibitions: Ancient Traditions in Modern Era - Prohibitions on Food and other Life Aspects -)」を研究活動テーマとして設定し、禁止に関する規定の内容的な特徴やその有無などに注目することで、一神教のみならず諸宗教の比較考察を視野に入れている。今回のシンポジウムはその第一弾である。講演者は、ラビ・ジョン・マゴネット氏と小田淑子氏のお二人だった。マゴネット氏は聖書がご専門であるが、ご自身がラビでおられる。一方、小田氏は宗教学、特にイスラームがご専門であり、イスラーム思想、宗教共同体、宗教における倫理と法、宗教研究の方法論などに造詣が深い。以下、お二人の講演内容の概要である。

マゴネット氏は、「カシュル—ユダヤの食物規定」というタイトルで講演された。まず、規定に関する聖書の典拠であるが、「カシュル」の元となる 'kashar' はエステル記 (8:5)、コヘレトの言葉 (10:10 ほか) に現れ、「適切である」などを意味する。聖書には分類リストしか存在せず (レビ記 11:1-2)、その原理に関する説明はない。創世記によれば、神の元々の意図とは人間は菜食であるべきというもので (1:29)、肉食の許可はおそらく人間の本性的弱さへの配慮である (9:1-17)。神に対する犠牲や人々の食物のために草食動物が容認されているが、そこには人間に菜食を求める神の意思との一致への試みが示唆される。

次にラビ・ユダヤ教におけるその拡大について。ヘブライ語聖書の正典化は、バビロン捕囚への応答の一端であり、民族的アイデンティティを保持するための、代替的な政治的、精神的体系の創造を導いた。第二神殿の破壊や世界の隅々への離散に伴い、ラビによる祈りと研究がその中心と

なったが、犠牲祭儀は消滅した訳ではなく、「家庭的な」ものとなった。食物規定が急進的な変容と拡張を遂げたのは、この文脈においてである。犠牲儀式の欠落によって、動物をいかに屠殺するかが主要な関心事となった。申命記 12:21 は、ある状況下における、人々による屠殺を容認しているが、その詳細を記していないので、それらは口伝律法によって与えられたと理解される。'shechita (儀礼的屠殺) の法' は非常に複雑なものになった。コーシェルと考えられる食物を用意するのは、家長が注意しなくてはならない要件である。その複雑さの最も良く知られた例は、肉と乳を同時に食べることの禁止であり、ラビは、子供をその母の乳で調理しないことに関する聖書内の反復 (出エジプト記 23:19、34:26、申命記 14:21) にその根拠を見出した。しかしながら、他のラビ的原理である、「律法の周りに垣根を造る」要求も存在した。これは、ある法を破ることを回避のために、他の法がその周りに「垣根」として造られなくてはならないことを意味し、それ故、家庭用品、食器類などが乳や肉の製品のために分けて使用される。これらの配慮は一般入手可能なあらゆる食物に拡張され、そのため、法を遵守するユダヤ人がそれらを安心して食べられるよう、コーシェルとしての食材の製造を監督、保証する総合的な産業が存在する。

食物規定は、ラビの権威に導かれた閉じたシステムの中に存在する傾向にあったので、初期には効果的に機能した。ラビの権威が深刻に疑問視されることはなかったが、ヨーロッパの啓蒙主義と解放の覚醒の中で現実的な問題となった。解放は、ユダヤ人であることによる制約の緩やかな除去と、十全な市民権や平等を与えられた者としてのユダヤ人の承認を意味した。より広い世界に統合するための探究の中で、食物規定はしばしば真っ先に放棄された。しかしそれは、多くのユダヤ人にとって実践的核心を表現するものだったので、カシュ



Jonathan David Magonet 氏



小田淑子氏

ルートの中心的な面が shechita への関心から攻撃されることは非常に深刻だった。shechita を批判する者は、それが動物に著しい苦痛を引き起こすので禁止すべきであり、屠殺前に気絶させるべきだと主張した。研究と実験は、ユダヤの方法が実質的に無痛であるとの主張の根拠を示す一方で、気絶させる方法はこの点において確実とは言えない。解放の結果としての市民や共同体の権利は、反ユダヤ主義の終焉を意味しなかった。19 世紀末、反ユダヤ主義的な政党は、スイスやドイツ、スカンジナビア半島でのユダヤの儀礼的屠殺を禁止する法律制定のキャンペーンのため、動物愛護団体と結び付き、20 世紀には、ノルウェー、アイスランド、デンマーク、ラトビアなどにおいて、shechita の禁止を導いた。「屠殺に関する動物保護のヨーロッパ協定」(1998 年、EU) は、概して、屠殺前の気絶を要求したが、宗教的な屠殺に関してはメンバーに免除を許す地位を容認した。しかし、この数十年、ユダヤとムスリム双方への、ヨーロッパ諸国におけるあらゆる形態の屠殺を禁止する試みが増加し、ユダヤの観点からは、反ユダヤ主義の新たな潮流をこの中に見て取ることは困難ではない。

次に、イスラームのハラールについて、小田淑子氏から「イスラームの戒律—食物規範を中心に—」というタイトルで、以下の説明がなされた。

イスラームの食物規範はクルアーンに基づく。クルアーンでは「死肉、血、豚肉、アッラー以外の名を唱え屠られたもの」(2:173) が禁止され、それ以外は「許可された」食べ物である。ハラール肉は、アッラーの名を唱えて頸動脈を切断して屠殺した動物の肉であり、ユダヤ教における屠殺方法と類似性を持つ。ハラールとは「許された」という意味で、食べ物に限定されない。クルアーンで、アッラー以外の名において屠られたり、アッラー以外の神々に供えられたりした動物の肉の禁止が強調されるのは、クルアーンが啓示された当時、多神教徒が残っていたからである。だが、「イスラーム共同体 (ummah)」の成立後、そこで入手する食料はほぼすべてハラールであり、ムスリムたちが食物規範を意識することは少なかった。ムスリムが再び食物規範を意識する必要に迫られたのは、彼らが非イスラーム地域に居住し始めた時期である。

次に、食物規範の意味について。イスラームにおいて食物規範はシャリーアという規範体系のごく一部分である。イスラームにおいてシャリーアの遵守が非常に重要な宗教的・救済論的な意味をもつ。シャリーアは儀礼規範と社会規範に大別

され、社会規範の大半は道德規範、行儀作法などであり、食物規範もここに位置づけられる。シャリーアの原義とは「水場に至る道」であり、儀礼行為と社会規範の双方において、以下の 5 段階に区分される。①義務行為 (行うことが義務で、行わないと罰せられる)、②推奨行為 (行うことが望ましいが、行わなくても罰せられない)、③行っても行わなくてもいい行為、④忌避行為 (行わないことが望ましいが、行っても罰せられない)、⑤禁止行為 (行うことは禁止され、行うと罰せられる)。シャリーアの体系は法律ではなく、ムスリムの生き方の指針を意味し、その遵守が救済に至る方法であり、食物規範の順守も同様である。ただし、創始宗教にもかかわらず、教会制度をもたないイスラームのウンマは理念的にはシャリーアによる統治を意味した。近代国家の創設以後、このシャリーアによる統治は崩れたが、今日でもシャリーアは儀礼規範と家族規範を中心にかなりの有効性をもつ。

講演の締めくくりとして、小田氏は「日本人と戒律」というテーマに言及された。神道は穢れを嫌い、祭りの準備期間に潔斎の食事規範がある場合もある。しかし、神道が普段の食べ物に関して禁止する食材や調理法はほぼない。仏教の出家者は家庭生活と経済活動を離れるのが原則だが、日本の仏教僧の大半が結婚し、大多数の寺は世襲されている。これは仏教圏でも日本のみの特徴である。食物規範を含め、日本人は戒律や律法に拒否感が強い。その理由の一つは日本の宗教が厳しい戒律を課さなかったこと、第二に、現代の日本では宗教教育が不十分で、その乏しい知識が教義に偏り、儀礼や生活様式を教えないことによる。だが、グローバル化が進む現代において、日本人もイスラームやユダヤ教など戒律、律法を遵守する宗教を理解し、生活様式の異なる他宗教の人々との共生に慣れていかねばならない。他宗教への寛容の実現には、教義の違いを知ること以上に、儀礼や食事といった行動面、生活様式の相違を理解して、他者を尊重することが重要である。

上記のように、今回のシンポジウムは、日本人にとって必ずしも馴染みがあるとは言えない、ユダヤ教とイスラームの食物規定に関する貴重な紹介となった。「宗教における禁止」というテーマは、2019 年 2 月に予定されている、仏教も含めたシンポジウムで扱われる予定である。

(CISMOR 特別研究員 北村徹)



左から、
(前列) Jonathan David Magonet 氏、
Ada Taggar-Cohen 氏 (CISMOR
センター長)、小田淑子氏
(後列) 山本孟氏 (通訳)、
Shirah Malka Cohen 氏 (通訳)、
北村徹氏 (司会)

公開講演会

エジプトにおける日本文化—アニメを中心に—

(Japanese Culture in Egypt – Focusing on Animation)

主催： 同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)

共催： 同志社大学神学部・神学研究科

【講師】 Amal Refaat Youssef Hassan

(カイロ大学文学部講師、同志社大学一神教学際研究センター客員研究員)

【日時】 2018年6月19日(火) 16:40-18:10

【会場】 同志社大学今出川キャンパス 至誠館1階S1教室

同志社大学一神教学際研究センターでは専ら一神教の社会に関わる問題や事件が扱われるが、今回、いわゆるイスラーム社会であるエジプトにおいて、日本文化、とりわけ日本のアニメがどのように関わっているか、また日本文化がイスラーム世界にどのように紹介されているか、についての講演が催された。

Amal Refaat Youssef Hassan 氏によれば、現在のエジプトでは日本のアニメが若者達に大人気であるとの事であった。カイロ大学等の日本語学科の志望動機や日本語学科で日本語を学ぶ目的としては、以前は「日本は先進国だから」「日本語を学べば仕事を見つけやすいから」といったものが大半であったが、6年程前から志望動機の中に「アニメ」というフレーズを耳にするようになり、中には「アニメは私の人生、夢」「私はアニメのキャラクターになりたい」といった動機で日本語学科を志望する若者もいた。そこで、エジプトの学生達にここまで人気のある日本のアニメについてもっとよく調べてみようと思い立った、とのことであった。

日本人が主にイメージするエジプトの文化は、その殆どが「ピラミッド」「スフィンクス」「エジプト文明」といった太古の時代のものが多い。古代のエジプトは多神教社会であったが、現代のエジプトは、総人口の約90%がムスリム、約10%がクリスチャンであるが、彼らの祖先が信仰していた多神教の影響も受けているといえる。

エジプトの若者が日本についての知識を得ようとする際には、今や本や漫画ではなくアニメを情報源とするようになり、漫画とアニメ、カトゥーンとを区別するようになってきた。加えてインターネット、SNSを活用している等、エジプトの若者も日本の若者と然程変わらない生活を送っている。

エジプトでアニメが普及した大きな要因は、①“Space toon” (衛星放送) のサービス開始、②インターネットの急速な普及、の2点であった。エジプトのアニメの歴史は、古代の壁画の例を除けば、1935年か

ら始まっていたが、当時のアニメは殆どコマーシャルの様なものであった。また「バカー」(1998-2003)の様な、典型的なエジプトのアニメは道徳やモラルを教えていた。そして、2003年以降、日本のアニメが急速にエジプトに導入されていた。

エジプトでは“EGYCON”というグループが創設されており、このEGYCONによって年に2回程様々なイベントが催されている。その1つがコスプレである。他のイベント事例としては、“The Experience of Education in Japan”や、日本語を勉強する為のイベントもある。また、アニメに関するファンサイト(例:“Anime Fans Arabs”, “Anime Madness”, “The amazing anime”, etc.)には、①誰でも参加できるサイト、②クローズドなサイト、等があり、エジプト人だけのファンサイトも存在している。ファンサイトの中には、アニメの日本語会話にアラビア語の字幕(意味の正誤を問わず)が充てられているものもある。これは一種のコミュニティとなった。日本のアニメは「いつか日本語が上手に話せるようになるだろう」という感じで日本語学習の動機付けや日本の肯定感にも繋がると説明があった。但し、そこで覚えた言葉の中には日本語の発音が単にアラビア語で書かれただけのものもあり、どんな人物がどんな時に誰に対して使う表現か、使い分けがわからない時もある(目上の人に対して「おーい」「お前え」と云う人もいる)とのことであった。また、いわゆる「オタク」が8種(「賢いオタク」「ゴールドオタク」「伝説なオタク」「ロマンティックなオタク」「新世代のオタク」「不良なオタク」「麻薬常習者なオタク」「現実的なオタク」)に分類されることを示した。

最後に、エジプトの若者達に新しい人間観を提起するという点に於いて影響力のある日本のアニメについて、今後はもっと「日本の心」を描写する作品が生産されることを希望し、講演を締め括った。

(CISMOR 特別研究員 阿部泰士)



Amal Refaat Youssef Hassan 氏

シンポジウム

The Third Symposium on Jewish Studies

(第3回 国際ユダヤ学シンポジウム)

“Judaism in Modern Era – Interpretative Studies of Ancient and Current Texts”

主催： 同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)

同志社大学神学部・神学研究科

エルサレム・ヘブライ大学



Uzi Rebhun 氏



Paul Mendes-Flohr 氏



Zev W. Harvey 氏



平岡光太郎氏



小野文生氏

【講 師】 Paul Mendes-Flohr ほか 13 名 (詳細は本文参照)

【日 時】 2018 年 8 月 19 日 (日) 9:00-19:30

【会 場】 The Avraham Harman Institute of Contemporary Jewry Gaster Building,
The Hebrew University of Jerusalem
- Mount Scopus Meeting Room #400, on the second floor

2018 年 8 月 19 日、CISMOR、同志社大学神学部、ヘブライ大学の共催によって、第 3 回ユダヤ学シンポジウムが、エルサレムのヘブライ大学マウント・スコープスキャンパスにおいて開催された。前回は 2013 年であり、5 年ぶりの開催である。当初の予定では、アダ・タガー＝コヘン CISMOR センター長が開会の辞を述べ、研究発表も行う予定であったが、都合により不参加となった。そのためシンポジウムは、平岡光太郎氏 (同志社大学研究開発推進機構特別任用助教・神学部) による開会の辞の代読で始まった。なお、今回のシンポジウムはコヘン教授、平岡氏による企画の立案、ヘブライ大学のゼブ・ハーヴィ名誉教授、ポール・メンデス＝フロア名誉教授の協力により、開催された。大会プログラムは以下の通りだが、質疑応答などが非常に活発に行われた結果、予定終了時刻を大幅に超過し、19:30 頃の終了となった。

Program

09:00-09:10

Opening words – Kotaro Hiraoka in the name of Ada Taggar-Cohen, Director of CISMOR

Greetings by Prof. Uzi Rebhun, Vice Dean of the Humanities

09:10-09:40

Paul Mendes-Flohr, “Jewish Studies in Historical Perspective”

09:40-10:10

Kotaro Hiraoka, “Martin Buber’s Reception of Hassidism”

10:10-10:40

Fumio Ono, “Religious Anarchism and Bipolarity in the Thought of Martin Buber”

10:40-11:10

Masato Goda, “On Spinoza’s ‘Abrégé de grammaire hébraïque”

(Chair: Zev W. Harvey)

11:20-11:50

Joel Swanson, “Speech and Silence: Two Modern Readings of Psalm 115”

11:50-12:20

Tetsu Kitamura, “The Lack of ‘Zion’ in the Book of Ezekiel”

(Chair: Kotaro Hiraoka)

13:30-14:00

Zev W. Harvey, “Maimonides and Bialik on Spoken Hebrew”

14:00-14:30

Anri Ishiguro, “Progress and Ambiguities: Kaufmann Kohler’s Vision for Jewish Women and Zionism during the Transitional Period of the Reform Movement”

14:30-15:00

Yu Amano, “Western Influence on Jewish Intellectuals in Iraq”

(Chair: Paul Mendes-Flohr)

15:10-15:40

Tzvi Schoenberg, “Language and Ordinary Experience in Early Hasidism: Preliminary Remarks”

15:40-16:10

Ori Werdiger, “Secularism According to two 20th Century Jewish Mystics: A. I. Kook’s and Léon Askenazi’s Explications of a Talmudic Tale narrating the Rabbinic Victory Over Idolatry”



(Photo: Paul Hiraoka)



合田正人氏



北村徹氏



石黒安里氏



天野優氏

16:10-16:40

Moses Lapin, “What is Medieval Political Philosophy? Our Averroes and Averroes’ Plato”

16:40-17:10

Orr Scharf, “Hermann Cohen's Reading of the Sinai Revelation: Between Observance and Remembrance”

17:10-17:40

David Cohen, “A World Founded on Chesed; the Source and Content of the Ethical-Halachic Life”

(Chair: Fumio Ono)

17:40-17:50

Closing Remarks

日本からは、合田正人氏（明治大学文学部教授）、小野文生氏（同志社大学グローバル地域文化学部准教授）、既出の平岡光太郎氏、石黒安里氏（同志社大学研究開発推進機構特任助教・神学部）、天野優氏（同志社大学神学部博士後期課程）、そして北村が研究発表を行った。“Judaism in Modern Era – Interpretative Studies of

Ancient and Current Texts” というシンポジウムのタイトルに相応しく、発表内容は近現代の立場から解釈的研究を行うものが中心だったが、時代的にはタナハ（ヘブライ語聖書／旧約聖書）から現代まで、分野的にはマルティン・ブーバーやスピノザなどの思想から、アメリカ・シオニズムの分析、タルムード解釈による 20 世紀のユダヤ神秘主義の動向など、多岐に渡るものであった。15 名の発表に対して単日の開催はスケジュール的にやや厳しく、例えば二日間などの開催であれば、議論もいっそう深まったと思われ、その点はやや残念であった。研究発表者以外の参加者も多く、ヘブライ大学留学中の日本人なども含め、総勢 25 名前後のシンポジウムとなった。なお、今回のシンポジウムの発表内容は、2019 年に CISMOR から出版される予定である。

末尾となるが、今回のシンポジウムの準備・運営については、ヘブライ大学の事務の方のサポートに非常に助けて頂いたことを、感謝とともに記したい。

(CISMOR 特別研究員 北村徹)

2018 年度前半 活動報告

主催イベント

【国内開催】

2018 年 4 月 12 日 (木)

▼CISMOR ワークショップ

“Cross-cultural Flows: Black Characters in American Animation, Anime-inspired Cartoons and Anime”

講師：Michal (Miki) Dalot-Bul

(ハイファ大学アジア研究科・准教授)

会場：同志社大学今出川キャンパス 至誠館 S34 教室

2018 年 4 月 14 日 (土)

▼CISMOR ワークショップ

CISMOR First Young Scholars' Workshop

(第 1 回 CISMOR 一神教学際研究会)

“Studies in Religion: Bible and Jewish Studies”

発表者：Yuji Endo ほか 13 名 (詳細は本文参照)

会場：同志社大学今出川キャンパス 神学館 G31 教室

共催：同志社大学神学部・神学研究科

2018 年 4 月 19 日 (木)

▼第 14 回 CISMOR セミナー

“Christians in Aleppo (16th-19th Century): Communities and Individuals”

講師：Bernard André Heyberger

(フランス国立社会科学高等研究院教授)

会場：同志社大学烏丸キャンパス 志高館 SK203 教室

共催：同志社大学グローバル・スタディーズ研究科

2018 年 5 月 26 日 (土)

▼第 15 回 CISMOR セミナー

“When the Missionary Meets the Other: The Case of a Dane, Jens M.T. Winther (1874-1970) – Based on His Own Words”

講師：Christian Morimoto-Hermansen

(関西学院大学法学部・教授)

会場：同志社大学今出川キャンパス 至誠館 3 階会議室

お知らせ

CISMOR の出版物である『一神教学際研究 (JISMOR)』と『一神教世界』は、電子版の需要に鑑みて、かねてより機関リポジトリの導入や当研究センターウェブサイトでの PDF ファイル公開などによる電子版への移行を進めてきました。これらの出版物の公開につきましては、電子版のみの発行となります。

2018 年 6 月 16 日 (土)

▼シンポジウム

「宗教と禁止：ユダヤ教の『コーシェル』とイスラームの『ハラール』に関する法の理解」

(Religions and Prohibition: Understanding the Jewish ‘Kosher’ Laws and the Islamic ‘Halal’)

講師：Jonathan David Magonet

(レオ・ベック大学 (ロンドン) 名誉教授)

小田 淑子

(元・関西大学教授)

会場：同志社大学今出川キャンパス 神学館チャペル

共催：同志社大学神学部・神学研究科

2018 年 6 月 19 日 (火)

▼公開講演会

「エジプトにおける日本文化—アニメを中心に—」

(Japanese Culture in Egypt – Focusing on Animation)

講師：Amal Refaat Youssef Hassan

(カイロ大学文学部講師、同志社大学一神教学際研究センター客員研究員)

会場：同志社大学今出川キャンパス 神学館チャペル

共催：同志社大学神学部・神学研究科

2018 年 8 月 19 日 (日)

▼シンポジウム

The Third Symposium on Jewish Studies

(第 3 回 国際ユダヤ学シンポジウム)

“Judaism in Modern Era- Interpretative Studies of Ancient and Current Texts”

発表者：Paul Mendes-Flohr ほか 13 名 (詳細は本文参照)

会場：The Avraham Harman Institute of Contemporary Jewry
Gaster Building, The Hebrew University of Jerusalem

- Mount Scopus Meeting Room #400, on the second floor

共催イベント

【国内開催】

2018 年 4 月 23 日 (月)

▼公開講演会

“The Christian Minority in Syria and the Impact of War on Their Communities”

講師：Bernard André Heyberger

(フランス国立社会科学高等研究院・教授)

会場：同志社大学烏丸キャンパス 志高館 SK214 教室

主催：同志社大学グローバル・スタディーズ研究科

CISMOR 最新情報を発信中です

<http://www.cismor.jp>

CISMOR ウェブサイトより、最新情報を発信しています。出版物をはじめ、過去の講演会の動画、ニュースをご覧いただけます。

発行	同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)	TEL 075-251-3726 FAX 075-251-3092
	〒602-8580 京都市上京区今出川烏丸通東入	E-mail rc-issin@mail.doshisha.ac.jp
編集	CISMOR 事務局編集部	